

コミュニケーション

No. 95

2018.3月号

Contents

- P2・3 園長あいさつ
こんにちは! あかちゃん
移動動物/訃報/飼育動物数
- P4・5 〔特集1〕
飼育下でのイヌワシ保全
生息域外保全の現状と課題
- P6 〔特集2〕
3年目を迎えた
アートプロジェクト
「大森山Arts&Zoo」
- P7 冬の風物詩「雪の動物園」
- P8・9 飼育レポート/動物病院から
- P10・11 イベントレポート
今後のイベント
- P12 飼育日誌/お客さまの声
かたばた通信

Greeting 開園45年目を迎える大森山

園長 小松 守

今年は大森山動物園開園45周年という節目にあたります。大森山公園の建設を機に1973年に前身の千秋公園児童動物園の精神性を引き継ぎ、大森山で新スタートを始めてからのことです。秋田の動物園としても70年近い歴史を刻んできたことになりす。

この間の様々な取り組みの中、最近10年は「動物と語らう森」をテーマに掲げながら動物園づくりを進めてきました。人と動物がより近く、そして動物と「こころ」を通わせてほしいという願いを込めたテーマです。テーマを掲げながら活動をする動物園はあまりないようですが、大森山動物園の特徴になっています。それは、動物園に対する市民理解、ネーミングライツパートナーの秋田銀行様をはじめ多くの支援や応援、そして忘れてならないのはスタッフの理解と創意工夫、地道な取り組みのたまものです。

結果として、新たな大森山のステージを築くことができたようにも思います。豊かな自然環境に包まれながら、動物園は人と動物にやさしい空間、お客様が「幸せな時間」を感じとれるスポットに成長しはじめています。

に思えます。ガラス越しに目の前でフラミンゴの子育てをお客様がやさしく見守る風景はそんな一端を現しています。博物の領域を超え、多様な動物との出会いとふれあいが人の心にひびくユニークなスポットになってほしいものです。

こうした動物園内活動にとどまらず、最近では地域連携や多方面のつながりづくりを模索する動きも出てきました。動物園が秋田市の都市装置としてどう役割を果たせるのか、歴史を振り返りつつ節目の年を機に改めて考えながら、より多くの人に愛されるための動物園づくりに歩みを進めて行きたいものです。今シーズンも大森山動物園をどうぞよろしくお願い申し上げます。



フラミンゴのヒナとそれを見つめる来園者

こんにちは!

あかちゃん

8月以降に大森山で生まれた赤ちゃんをご紹介します。



おまめ(8月)



おまめ(10月)

フラミンゴ

8月17日にチリーフラミンゴ、8月24日にヨーロッパフラミンゴのヒナが生まれました。おそらく日本一子育ての様子がお客さんの近くから見える巣だと思ひます。順調に成長し12月にはずいぶん大きくなりましたが、まだ親から口移しでミルクをもらっています。



ヒナ(8月)



ヒナ(12月)

コモンマーモセット

8月19日に3つ子で生まれました。残念ながら1頭は5日目亡くなりました。お母さんのおっぱいをあまり飲めなかったようです。残った2頭のうち、もう1頭も小さく弱々しかったため、人工哺育に切り替えました。担当者が「おまめ」と名付け、体重の増減に一喜一憂しながら、数人で協力して育てました。今は家族と一緒に暮らせるようにトレーニング中です。

このほか、アカカンガルーに赤ちゃんが生まれています。

よろしくね!

仲間入りした動物たち



チンパンジー

10月18日に横浜市野毛山動物園から可愛いメスのチンパンジー「ルイ」がやって来ました。ルイのお父さんは大森山で生まれ、15年程前に横浜へ貸し出したコブヘイです。先輩チンパンジーをはじめ、担当者とも仲良くなってもらいたいです。



イワシャコ

10月30日に東京都多摩動物公園からイワシャコ4羽(オス2メス2)がやって来ました。雪の動物園からキジ舎で展示場デビューしました。隣のライチョウに比べて動きが活発で、見ていて飽きません。



ユメ(手前)とハルカ



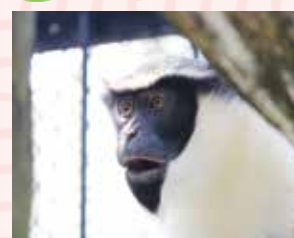
ノゾム(オス)

キョン

11月18日に東京都立大島公園からキョン3頭(オス1頭、メス2頭)がやって来ました。これまでオス1頭だったのにぎやかになりそうです。暖かい大島から秋田の環境に慣らすため、外での展示は春からの予定です。

元気でね!

大森山を後にした動物たち



ダイアナモンキー「ウーロン」

ダイアナモンキーのウーロンが札幌市円山動物園に引越しました。ダイアナモンキーは希少種で、繁殖計画が立てられている種類です。札幌で新しい家族をつくり、早くお父さんになってもらいたいです。

ヨーロッパフラミンゴ6羽が仙台市八木山動物公園に、カピバラ3頭が横浜市金沢動物園に、コモンマーモセット1頭が那須ワールドモンキーパークにそれぞれ繁殖を目的とした動物の貸出しをしました。

このほか、アカカンガルー、ボリビアリスザル、ケヅメリクガメ、シロフクロウが他の動物園等に旅立ちました。

飼育動物数 2017年12月末現在

哺乳類	52種	333点
鳥類	28種	148点
爬虫類	11種	24点
両生類	2種	3点
魚類	3種	42点
無脊椎	1種	23点
合計	97種	573点

訃報 忘れないよ...



ポニー

「アルファー」(9月13日死亡) アルファーは2007年3月に大森山動物園にやって来ました。お客様とのふれあいを楽しんでいる一方で、飼育員のブラッシングを嫌がる頑固な所もありました。数年前に足を痛め座っていることが多くなり削蹄などの対策をしていましたが、急に立てなくなり、数日後息を引き取りました。

ヒツジ「モッコ」

(11月6日死亡)

アカカンガルー「ザラメ」

(10月12日死亡)

ヒツジのモッコは2005年の3月にまだ子羊で来園しました。年齢からか2017年の5月下旬から自力で立ち上がれなくなりました。

アカカンガルーのザラメは2歳のオスでした。歩き方がおかしくなり、関節に腫れが見られ、検査をしたところ、靱帯が断裂し、化膿していることが分かりました。

どちらも飼育員、獣医師が協力して治療に当たりましたが、これ以上治療しても回復が見込めず、苦痛を与えると考え安楽死という選択を取りました。とても残念です。

このほか、ニホンザル、インドクジャク、マーコール、インドホシガメが亡くなりました。

飼育下でのイヌワシ保全 生息域外保全の現状と課題

飼育展示担当 副参事 三浦 匡哉



日本イヌワシ研究会の調査によると、国内での野生イヌワシの繁殖成功率は年々低下し、絶滅も心配されています。(図1)

動物園のイヌワシ飼育は展示が主目的ですが、一方ではこうした野生状況にも関心をもちながら行っています。例えば、野生でイヌワシの数がどんどん減り、野生復帰が必要になった時、動物園が役立つ日が来るかもしれません。実際に日本ではトキやコウノトリの野生復帰の実例があります。動物園での動物飼育はいざという時の保険のようなもので、動物園の重要な役割の一つになろうとしています。こうした考え方を生息域外保全と言い、イヌワシ飼育でも重要になっています。

公益社団法人日本動物園水族館協会ではイヌワシをはじめ様々な希少種の保全に30年近く前から力を入れており、大森山動物園はイヌワシ飼育の実績から同協会内での同種の繁殖計画担当園に指定されています。昨年11月に同協会主催の種保存会議で当園はイヌワシの生息域外保全の現状と課題について発表しましたが、多くの人に動物園活動の一端を理解していただきたいと考え本特集としました。

1 全国での飼育数の推移

1991年から全飼育イヌワシについて血統登録が始まりました。当初の飼育施設、登録数は4園で11羽(オス7、メス4)、うち7羽(オス4、メス3)が野生由来の個体でしたが、2016年末までの累計登録数は9園で82羽となりました。内訳は野生由来15羽(オス6、メス9)、繁殖個体65羽、その他、韓国の動物園由来の2羽です。

ちなみに、2016年末現在の飼育数は48羽(オス30、メス17、不明1)です。

2 数を増やす取り組み

飼育個体数は当初なかなか増えませんでした。飼育園や飼育数が少ないことや繁殖生態もよくわからなかったこと、さらには繁殖期が年1回で産卵も1回2個と少ないこと、せっかく孵化してもヒナ同士の兄弟間闘争で1羽しか育成しないことなど多くの課題がありました。

当園も様々な研究を進めましたが、その一つが孵化したヒナの全部育成を目指す方法で精力的に取り組みました。内容はヒナの兄弟間闘争を回避し、かつ兄弟ヒナとも親鳥との関係性を

失わずに育成させるため、自然(親)育雛と人工育雛を数日交代でローテーションさせる方法を編み出しました。こうした取り組みや各飼育園の様々な努力もあり個体数は2005～2006年頃から増え始めました。

(2006年7月発行 コミュニケーションNo.72号に詳しく掲載)

3 飼育下個体群の遺伝的多様性について

2016年末の飼育数48羽のうち40羽は動物園で繁殖したものです。繁殖は3ペア(野生由来個体オス2メス3)ですが、ルーツを遡ると内2ペアのメスは秋田県田沢湖周辺の同種の異母姉妹であり、遺伝的な偏りが懸念されます。また、残る1ペアのオス親は国内保護個体ですが、過去のDNA解析では国内由来かどうかの判定ができない状態で、その親からの子が今後の繁殖に寄与できるかが不透明となっています。飼育している個体群の遺伝的な多様性を保ちながら飼育数を増やし維持していくには多くの課題があります。とにかく、まだ子孫を残していない野生由来の個体が新たなペア形成で繁殖できるような努力が欠かせません。

同時に、安定的で計画的な繁殖が可能となるように、繁殖経験のあるペアを増やすことも大事です。そのために繁殖を止めざるを得ないペアが産んだ有精卵や孵化したヒナを経験のないペアに移し、育雛経験を積ませるなどの取り組みも大事であり、何度かの挑戦で実績も出てきています。

有精卵の移動は4例全てで孵化に成功し、ヒナ移動も卵同様可能であることもわかりました。この場合、移動する双方のペア間で抱卵期間の同調なども必要であり、そうした研究も必要になってきます。こうした技術の蓄積は野生と飼育の間の種卵移動やイヌワシを野生復帰させるうえで重要な知見にもつながると思っています。(図2)

4 飼育下個体群の将来について

生息域外保全には動物園だけでなく、国や研究機関との情報交換や連携も重要です。環境省はイヌワシを保護増殖事業の対象種に指定し、その在り方を検討しており、研究機関も様々な研究を進めています。

当園とも連携している京都大学野生動物研究センターの解析では、近親交配を管理しつつ野生からの新規個体が加入しない場合、約150年後に集団が絶滅することが推定されました。一方、同様に管理しつつ、10年に一度野生個体2羽(雌雄1羽ずつ)を導入すれば、個体数が100羽前後で200年後でも遺伝的多様性が維持されることが推定されました。(図3)

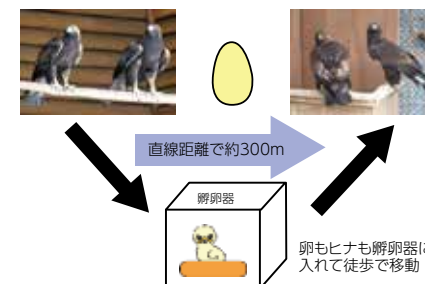
野生での繁殖率が低下していると言われ絶滅が心配されるイヌワシ。私たち動物園は展示によるイヌワシ生態の理解とともに、国や研究機関とともにイヌワシを保全する大きな仕事の一端を生息域外保全という立場で担っていききたいものです。

最後に、貴重なデータを供与していただいた、日本イヌワシ研究会、京都大学野生動物研究センターに感謝申し上げます。

図2 有精卵やヒナの移動

有精卵移動

第1弾(秋田市大森山動物園内) 2010(平成22)年

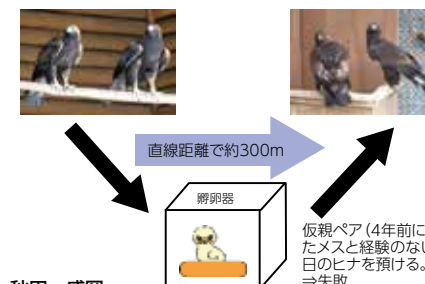


第2弾(秋田→盛岡) 2012(平成24)年 120km
第3弾(秋田→石川) 2013(平成25)年 800km
第4弾(秋田→仙台) 2015(平成27)年 240km

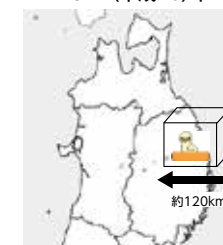
第2弾と第4弾は卵は孵卵器に入れて車で移動。第3弾は卵は孵卵器に入れて、車と飛行機(羽田空港経由)で移動。

ヒナ移動

2014(平成26)年 秋田市大森山動物園内



秋田→盛岡
2014(平成26)年



仮親ペア(4年前にヒナを育て上げたメスと経験のないオス)に生後7日のヒナを預ける。⇒失敗

2年前に卵からヒナを育て上げたペアに生後4日のヒナを預ける。⇒成功

図1 繁殖成功率の年変化 (1981-2015年 全国平均)と巣立ち雛数

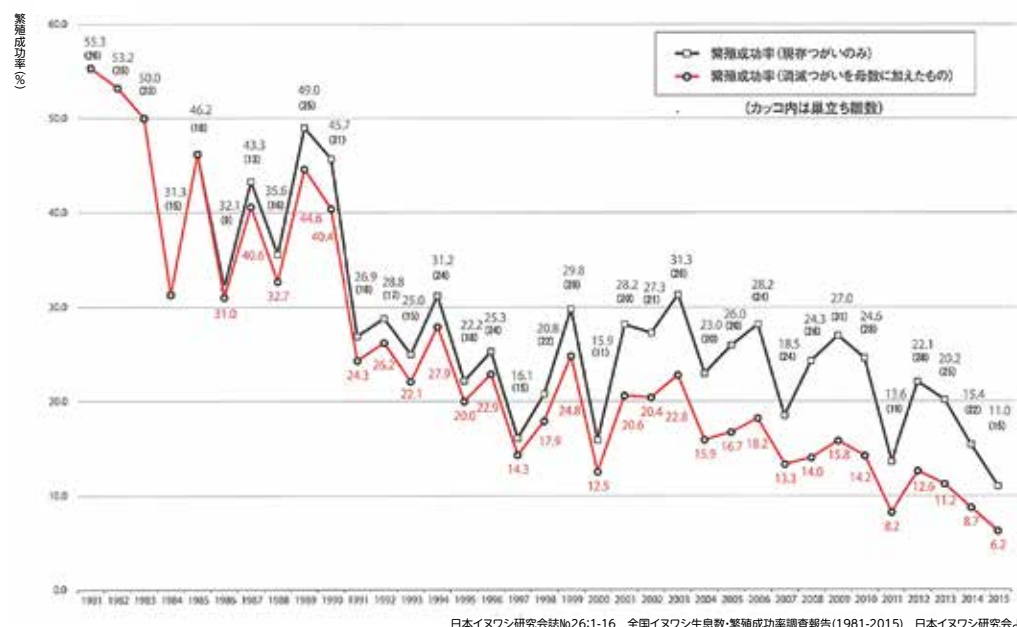
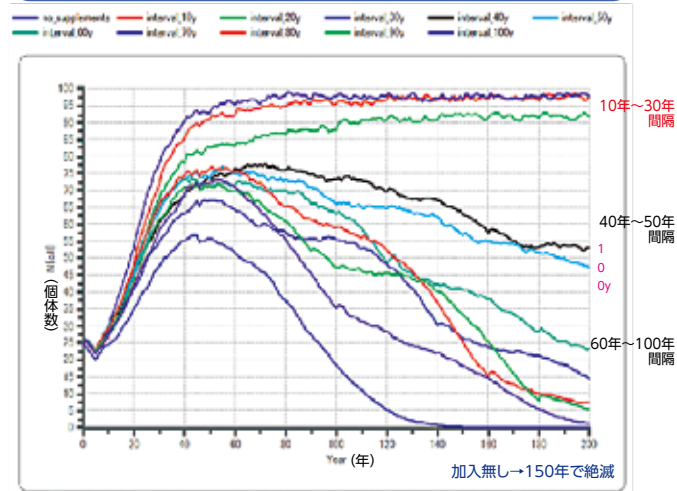


図3 新規個体の加入間隔による個体数の推移



3年目を迎えたアートプロジェクト 「大森山Arts&Zoo」

企画広報担当 主席主査 吉田 淳一



2015年から始まった大森山動物園と秋田公立美術大学（以下、美大）によるアートプロジェクト「大森山Arts&Zoo」が3年目を迎えました。

2017年はこれまでの壁画やオブジェに加え、園内の案内サインをアートで表現する試みが行われ、各エリアの代表的な動物たちの後ろ姿を重ねた作品「おしりでこんにちは!」が誕生しました。園内8カ所に設置された同作品は来園者からも好評で、動物を見るだけでなく園内を歩きながらアートを鑑賞するという新たな楽しみが生まれました。

また、高木美保名誉園長と美大の大谷有花准教授、小松園長によるトークイベント「動物園でアートを語る」が開催され、動物とアートの深いつながりについてトークが交わされたほか、美大附属高等学院の生徒が作成した動物絵本「ぼくらの1日」を高木名誉園長に朗読いただきました。

「大森山Arts&Zoo」は今回で一区切りとなりますが、今後は動物園内にとどまらず、大森山公園への作品設置やイベント開催なども行うことで美大との新たなアートプロジェクトとして、みなさんに楽しんでいただけるよう展開する予定です。



I'm from



bye-byeまたねStairs



いろどりの景色



トークイベント

冬の風物詩 「雪の動物園」

すっかり秋田の冬の風物詩となった「雪の動物園」は2006年から始まり、2017年は鳥インフルエンザの影響で中止となりましたが、2018年で12回目の開催となりました。

その歴史は1990年から2004年まで1日限定で開催した「冬の観察会」が始まりで、2005年には「冬の特別開園」として1月、2月に各3日間開催しました。

雪の動物園は冬ならではの動物たちの様子を見てもらうことを目的に開催しており、レッサーパンダやアムールトラなど寒い地域が生息地の動物たちは冬の方が生き

生きと活動しています。

また、トナカイやポニーの園内散歩やイヌワシ、ワシミズクとの記念撮影など冬でも動物たちとふれあえるのも雪の動物園の魅力です。

今回は新たに「カピバラの湯っこ」やレッサーパンダのエサやり体験などのイベントも加わり、よりお客さまに楽しんでもらえるようになりました。今後も雪の動物園が秋田の冬を代表するお楽しみイベントとなるよう、さまざまな取り組みで盛り上げていきます。



アムールトラ



レッサーパンダ



ワシミズク



トナカイの
園内散歩



カピバラの湯っこ



アムールトラの同居

飼育展示担当 主席主査 宇佐美 均

大森山動物園では2005年3月から希少動物であるアムールトラの飼育展示を行い、2008年3月には2頭の繁殖に成功しています。再び同種の繁殖を目指すため、2011年10月にオスのヒロシ（7歳）、2016年3月にメスのカサンドラ（4歳）を導入し、新たなペアとして現在にいたっています。

本来、野生でのアムールトラは単独で行動し、広い縄張りを持ち生活する動物です。動物園等の限られたスペースで他の個体と同居する場合、環境へ慣らすことや他の個体を認識させるための見合い等、十分に時間をかけ様子を観察する必要があります。そのため、メスの導入以降、お見合いや発情兆候の見極め等、行動の変化を中心に観察し同居に向けた様々な準備を進めてきました。

2017年12月、ようやく環境が整い屋外展示場で同居を行うこととなりました。

2頭の安全確保を最優先とし、観察体制や闘争が発生した場合の対応策等、役割分担や対応手法を何度も確認し12月5日に同居を開始しました。

初日は、十分な見合いの期間をとっていたこともあり、お互い敵意を表すような警戒行動もなく、メスが積極的にオスへ体をすり寄せたり、腹ばいになり交尾を促すような行動が数回観察されました。その行動に対しオスは

時々交尾姿勢を見せるものの、確実なものではありませんでしたが、良好な関係が確認できました。

アムールトラの発情期間は、約1週間から10日間続きます。ピークは発情の始まりから3日～5日頃とされていることから、その習性どおり日増しに交尾行動の回数も増え、妊娠の可能性が期待されました。しかし、1月になり再びメスの発情兆候が確認されたため、残念ながら12月の同居での妊娠はありませんでした。

2018年1月、2度目の同居を行っています。相性が良好なことから、今後も十分な観察を行い希少種の繁殖に向けた取り組みを継続していきたいと思います。



カサンドラ(下)とヒロシ



カサンドラ(左)とヒロシ

動物病院から

鳥インフルエンザ対策について

飼育展示担当 副参事 三浦 匡哉

2016年の11月に大森山動物園で発生した高病原性鳥インフルエンザ。動物病院という閉鎖された場所で発生したことや感染源が特定できなかったことから、どのような対策を取るか手探りの状態でスタートしました。

動物病院内で発生した場合、病院が機能不全になることを防ぐため、冬季間病院の入院棟に鳥を入れないことにしました。しかし、調子を崩した鳥や感染の疑いがある鳥をそのままにしておく、同居している鳥や周辺の鳥に影響が及ぶ危険性があるため、鳥類専用の隔離施設を作ることにしました。(写真1)

昨年の経験から、鳥を個別に管理すればその建物の中でインフルエンザを封じ込められることが分かったので、大型鳥類用の部屋を2つ、小型から中型の鳥を入れる部屋を2つ準備し、いざ発生したときのために防護服の着替えや感染性廃棄物を保管するための前室を各部屋に設けました。飼育室と前室の壁、天井、床は高压洗浄機で消毒できるような材質にしました。(写真2)

隔離施設を病院の隣に建てることに伴い、ニホンイヌワシの繁殖棟の行き先が問題になりました。当園ではニホンイヌワシの繁殖に力を入れてきたので、なくてはならない施設です。広く見える動物園でも建設に適した場所というのはなかなか見つかりませんでしたが、最終的にサル山の裏に建てることになりました。(写真3)

飼育している鳥を鳥インフルエンザから守るためにはどうしたらいいか？ ウイルスをネズミなどの小動

物や昆虫が運ぶことがあり、とても厳重に管理している養鶏場でさえ発生が見られることから、ウイルスを100%防ぐことは不可能です。

そこで、ポイントを絞って考えました。ガンやカモ等の水鳥がウイルスを運ぶことが知られており、死体をあさるカラスも感染源となる可能性があります。これらの野鳥から遠ざけるため、建物に入れられる鳥は建物に収容することにしました。クジャクを収容する新しい建物を作ったり(写真4)、使っていなかった建物をニホンコウノトリの越冬舎にしたり、エミューやトキ類でも改良しました。

次に、建物内に収容できないところは水鳥とカラスが展示場に入らないようにネットを取り付けました。ニホンイヌワシやフクロウがスズメ等の野鳥を捕まえることはありませんが、念には念を入れ、猛禽舎等はさらに細かい網目にしました。

ネットの取り付けには課題がありました。雪がネットに積もると雪の重みでネットが壊れてしまうことと、網目によって見づらくなることです。そこで、網の素材を選んだり、鳥インフルエンザのシーズン以外は取り外しができるようにいろいろな工夫を施しました。(写真5) 様々な業者さんに頑張っていただき、何とか年内にすべての工事を終えることができました。

鳥インフルエンザは目に見えるハード面だけでは防ぐことはできません。常日頃から危機意識を持ち、飼育員の長靴の洗浄消毒の徹底などソフト面の対応も非常に重要です。最後に、大森山動物園の希少な鳥類

を守るため、これからも鳥インフルエンザ対策には万全を期して臨んでいきます。



写真1 隔離棟



写真2 隔離棟内部(感染個体ではありません)



写真3 イヌワシ繁殖棟



写真4 クジャク舎



写真5 ネットを張ったペンギン舎

イベントレポート

Event Report



自然観察会

9月24日(日)

自然科学学習館との共催による自然観察会を大森山動物園と大森山公園で行いました。午前は公園に行き大森山にいる身近な生き物(野鳥、魚類、昆虫、植物)を観察したほか、フィールドゲームなどを行いました。午後は野外にあった植物を拾ってきて動物に見立てた工作を行いました。



参加者で生き物を観察

また、公園で拾ったドングリを特別に動物園のツキノワグマやニホンザルにエサとしてあげてもらいました。参加者は子ども5名、大人4名でしたが、時間いっぱい楽しんでいました。



公園の植物で工作

日新小学校わくわくフェスタ

10月4日(水)



異学年交流と動物園学習を目的に秋田市立日新小学校の全児童が徒歩で動物園を訪問する「日新わくわくフェスタ」は、各学年の学習内容とリンクさせた動物園活動に取り組んでいます。動物園を教育の場として活用できる方法を探りながら先生方との打ち合わせを重ね、事前事後の学習として飼育員が学校で児童に講話を実施したり、飼育員が作成した動物クイズの表現を先生方が手直ししたりするなど準備を行いました。

当日は900名近くの児童が来園し、園内は土日並みの混み具合でしたが、大きな事故や混乱もなく無事に終了しました。

後日、先生方と園職員の反省会では「動物園での活動が子ども達の学習に根付いている」「動物はカッコイイ、カワイイだけではない、様々な顔を持っていることを子ども達は知ることができた」との声もあり予想以上に貢献できたことを実感しました。



水生生物調査

9月30日(土)



参加者で地引き網を引く

園内の塩曳潟で市民ボランティアによる水生生物調査を行いました。当日はあいにくの悪天候でしたが、子ども17名を含む合計34名の参加がありました。定置網や地引き網を引いてもらい、捕れた魚を種類ごとに数えたり全長を計測したりしました。希少種であるゼニタナゴも11尾採捕でき、無事に生息していることを確認できました。目で見て触って感じてもらうことで、塩曳潟の現状をより深く理解してもらうことができたと思います。



ゼニタナゴを確認

秋の動物ふれあいフェスティバル

10月8日(日)



動物パレード

人気の動物パレードには、ペンギンやイヌワシ、ラマなどのほか、プロバスケットボールチーム秋田ノーザンハピネッツの「ビッキー」も参加し、写真を撮るたくさんのお客様でにぎわいました。このほか、動物舎裏側見学では普段入れないキリンやゾウ、チンパンジーなどの展示場に入り、動物になった気分遊ぶ子ども達の歓声があふれました。



チンパンジー展示場で遊ぶ子ども達

ジャンボウサギフェスティバルに初出品で初入賞!

10月14日(土)・15日(日)

秋田県大仙市中仙で開催されたジャンボウサギフェスティバルに大森山動物園から2頭を出品し、「あんこ」がM級めすの部で4~8位に授与される奨励賞を受賞しました。審査員からは「初出品で入賞できるのは、とても珍しい」という講評をいただき、頑張って飼育管理した成果だと、飼育チーム一同で喜びを分かち合いました。

また、全国各地からジャンボウサギの飼育や研究に携わる人が集まったシンポジウムにも参加し、国内と海外の飼育方法の違い等、今後の飼育に活かせるお話しも聴くことができ、有意義な1日でした。



西原智昭氏講演会

11月3日(金・祝)

「マルミミゾウとヨウムを絶滅から救うことはできるのか〜いま日本人にできること」と題し、アフリカの熱帯林地域で野生生物の研究調査や生物多様性保全に従事している理学博士・西原智昭氏に講演していただきました。学生から70歳代まで33名が参加し、日本人が絶滅の危機に瀕している野生動物の密猟や熱帯林の開発による環境破壊にどの



のように関わってきたかを知り、今私たちに何ができるのかを考える良い機会となりました。

さよなら感謝祭

11月26日(日)

11月最終日曜日に、お客様と動物たちへの感謝を込めて「さよなら感謝祭」を開催しました。セレモニーでは、高木名誉園長や動物園の運営にご協力いただいている団体の皆様が出席する中、秋田市立日新小学校の吹奏楽演奏に続き、2017年に亡くなったイヌワシの「鳥海」やコウノトリの「タイサ」など35種85点の動物に慰霊の献花を行い、秋田市立浜田小学校の児童代表が慰霊の作文を読み上げました。

その後のイベントでは、レッサーパンダへのエサやり体験やミルヴェンジャー7ショーなどを実施しました。



さよなら感謝祭セレモニー



ミルヴェンジャー7ショー

今後のイベント

2018年通常開園スタート

3月17日(土)~12月2日(日)

※期間中は無休



飼育日誌



8/1	ダイアナモンキー	ウーロン♂ 札幌市円山動物園へ搬出。
8/3	トナカイ	サクラ♀ 右角一部折れる。
8/4	チリーフラミンゴ	ヒナ1羽 死亡。
8/7	ミーアキャット	7/16生まれ 開眼確認。
	カナダヤマアラシ	モズク♂ 体重測定実施。7.95kg
8/11	カビバラ	ぐり♀ 捕獲し治療、抗生剤変更し展示ケース手前清掃実施。
8/12	アムールトラ	カサンドラ♀ 発情兆候確認。
8/16	ライオン	トモ♀ 発情兆候なし、妊娠の可能性あり。
	アフリカゾウ	だいすけ♀、花子♀ 採血実施。
8/17	チリーフラミンゴ	1羽ふ化確認。
8/18	アミメキリン	カンタ♂ 削蹄実施。
8/19	コモナーモセット	3頭出産確認。(8/23に1頭死亡)
8/20	サル舎	全種全頭に駆虫剤投与実施。
8/21	インドクジャク	♀ 1羽死亡。
8/22	チリーフラミンゴ	雛への授乳確認。
8/24	ヨーロッパフラミンゴ	1羽ふ化確認。
8/26	ミーアキャット	親子、展示場へ出す、仔も活発な行動確認。
8/27	シナイモツゴ	園内保全池に稚魚200尾以上生存確認。
8/29	チンパンジー	コタロウ♂、J太郎♂ 見合い実施。
8/30	アミメキリン	カンタ♂ フレーメン行動確認。
	リンリン♀	夜間採食行動調査開始。
	ライチョウ	瀑♂ 換羽開始。
8/31	カリフォルニアアシカ	アイラ♀ 換毛確認。
	アフリカゾウ	だいすけ♀ 体調不良(動き無く、壁面に寄りかかっている採食・飲水せず)経過観察。
9/3	アフリカゾウ	だいすけ♀ 体調不良経過観察及び治療実施。
9/4	コモナーモセット	おまめ♀ 群れと対面。
9/6	カリフォルニアアシカ	アイラ♀ 直接飼育に向けたトレーニング開始。
	ミニブタ	とん平♂ 9:00頃に発作あり、右後肢擦傷、イソジンスプレー散布実施
9/9	フラミンゴ	換羽ピーク。
9/11	ライオン	トモ♀ 乳首目立ってきた、妊娠の可能性確認。
9/20	ミーアキャット	親子と群♂、♀1も加えての同居訓練実施。
	アフリカゾウ	だいすけ♀ 体調不良経過観察及び治療実施、胃粘膜保護剤(デブレノン)投薬終了。
		花子♀ 採血実施。
9/24	カリフォルニアアシカ	マヤ♂ 左後鰭第2肢の爪一部割れている、要観察。
9/25	アミメキリン	カンタ♂ 追尾、フレーメン行動確認。
		リンリン♀ 採血実施。
9/26	ケヅメリクガメ	コタイ♂ 食欲低下、排尿あり、排便なし。皮下輸液実施。9/28レントゲン検査予定。
9/29	カリフォルニアアシカ	アイラ♀ 給餌量増量12kg/日。
	コモナーモセット	おまめ♀ 体重の伸びが悪い。
9/30	レッサーパンダ	ケンシン♂×ナナ♀ タ方同居訓練実施。
10/2	アカカンガルー	フレンドール♀ 涙目及び微熱等の異常確認。
10/3	コモナーモセット	おまめ♀ ミルクもあまり飲まない。
10/5	ヨーロッパフラミンゴ	6羽(♂3羽、♀3羽) 仙台市八木山動物公園へ搬出。
10/7	シバヤギ	パニラ♀ 発情。午後から信濃丞♂と同居開始、交尾確認。
10/8	トナカイ	ルドルフ♂ 交尾した可能性あり。
10/10	キョン	ソッケン♂ 両角枯角。
10/11	アムールトラ	カサンドラ♀ 発情兆候確認。
	アフリカゾウ	だいすけ♀ 体調不良経過観察、整腸剤一旦終了する。
		花子♀ 採血実施。

10/13	オオハシ	オオハシくん♂ 体重測定実施:369g
10/14	サル山(ニホンザル)	全頭室内収容追い込み作業実施。裏飼育個体2頭を群れへ戻す。
10/15	サル山(ニホンザル)	全頭捕獲、マイクロチップチェック実施。
10/21	ミニチュアホース	エルフィー♀ 右眼、目やにと涙あり、眼軟膏塗布。
10/23	ライチョウ	体重測定(白♂903g、瀑♂823g)。
	カビバラ	ぐり♀、ぐら♀ 抗生剤内服。
10/24	アミメキリン	リンリン♀ 右後肢蹄底部のやすりかけ。
10/26	ミーアキャット	別群♂との同居訓練実施、早々に闘争有り中止。
10/30	日本産両生爬虫類	冬眠のため展示終了。
10/31	アフリカゾウ	花子♀ 乾草の給餌量増量。
11/1	シナイモツゴ	保全池冬対策のため屋根設置。
	アフリカゾウ	だいすけ♀、花子♀ 午前中放飼する。
11/2	ライオン	トモ♀ 仔♂1頭出産確認、最終交尾日から92日。(11/3死亡)
	コモナーモセット	おまめ♀ 群れに戻す。
11/4	ライオン	トモ♀ 麻酔による検査実施。
	コモナーモセット	おまめ♀ 体重測定実施。74.3g
11/6	ジャンボウサギ	ヨシオ♂×アン♀ 交尾確認。
11/8	カリフォルニアアシカ	マヤ♂×アイラ♀ 同居訓練開始。
11/9	ライチョウ	白♂、瀑♂ 同居訓練開始。
11/10	アフリカゾウ	花子♀ 久々に足ケア実施。
11/12	フンボルトペンギン	茶白、紫茶 採血実施。
11/13	マーコール	弟♂ 前日入院個体死亡。
11/15	シンリンオオカミ	ジュディー♀ 室内収容訓練開始。
11/20	ライオン	トモ♀ 発情兆候確認。
11/22	シロフクロウ	♀1羽 盛岡市動物公園へ搬出。
	爬虫類	展示場に寒さ対策の断熱材等設置。
11/25	ビュマ	左前肢第一指の巻き爪による出血確認。
11/26	パジロオマキザル	群れの力関係に変化あり、交尾行動確認。
	フンボルトペンギン	ペンギン舎内個体群 産卵確認。
11/27	カビバラ	3頭(♀2頭、♂1頭) 横浜市金沢動物園へ搬出。
11/29	アフリカゾウ	だいすけ♀、花子♀ 採血実施。
12/1	チンパンジー	コタロウ♂ 脱肛あり。
	フンボルトペンギン	ペンギン舎内個体 採血実施。赤青 産卵確認。
12/2	ビュマ	麻酔による爪切り及び健康チェック実施。
	フンボルトペンギン	茶白/茶白 産卵確認。
12/4	アムールトラ	カサンドラ♀ 発情兆候確認。
	カリフォルニアアシカ	マヤ♂ 体温測定開始。
12/5	アムールトラ	ヒロシ♂×カサンドラ♀ 同居開始。
	コモナーモセット	♂4頭 福井市足羽山動物園へ搬出。
12/7	ロップイヤー	性別不明3頭 出産あり。
12/8	ニホンイヌワシ	信濃♂×たつ子♀、一風♂、涼風♀ 4羽を猛禽舎へ移動。
	シロフクロウ	ベア 猛禽舎へ移動。
	アフリカゾウ	花子♀ 削蹄実施。
12/9	ライチョウ	白♂、瀑♂ 終日同居。
12/12	フンボルトペンギン	青黄 産卵確認(2個目)。
12/13	アムールトラ	ヒロシ♂×カサンドラ♀ 同居終了。
12/14	アカカンガルー	ハニイ♀ 出生確認。(12/22死亡)
12/16	チンパンジー	コタロウ♂ 脱肛あり、検便実施、投薬。
12/19	シンリンオオカミ	ジュディー♀ 麻酔による検査実施。
	ニホンイヌワシ	信濃♂×たつ子♀ 交尾時の鳴き声確認。
	アミメキリン	カンタ♂ 蹄の過長、変形が進行(トレーニング下で確認する)。
12/23	フンボルトペンギン	赤白白 抱卵確認、産卵した様子(1卵目)。
12/25	アミメキリン	カンタ♂ 削蹄。リンリン♀ 採血実施。
12/26	コツメカワウソ	キトラ♂×わらび♀ 同居訓練を開始。
12/28	ツキノワグマ	コゴミ♀、ルビー♀ 冬ごもり開始。

お客さまの声

8/4 動物園路の表示がなく、どのように回れば良いのかわからない。同じ所を何度も歩かなければならないのでなんとかしてほしい。
(新しい園内マップに主な園路を記載しました)

8/14 女性のお客さまからコクチョウの事を聞かれ、昨年の鳥インフル絡みでの事を話したら号泣された。その女性はその鳥類を担当していた飼育員を労ってくれた他、全職員にこれからも頑張ってくださいと言っていた。

9/17 近くなら年パスでたくさん来たい！ 動物解説のイラストがかわいかった！ 小さい子供にも見やすい(柵でなくガラス等) 生き物が身近に感じられました。解説や案内等生き物への愛を感じました！

9/24 20年ぶりくらいに来ました。遊園地観覧車初乗りしたのですが、天気が良くて男鹿半島までハッキリ見られて面白かったです。

10/31 先月末に来園し、アシカをとて気に入りてくれたお客さま、夕方トレーニングの時間に合わせて来て下さり、前回来たときに買ったアシカのフォトカードと同じ笑顔が見れたと、とても喜んでた。

11/18 年パスをもっと高くしてもらっても大丈夫なので、動物たちにもっとよい環境で過ごしてもらいたいです。あと、もっとオモリングッズ出してほしいです。動物たちのオリジナルグッズも。ぜひ買いたいです。
(キーホルダーなど新オモリングッズを販売予定です)

11/26 今日のイベントについて、ミルヴェンジャーとうさぎのエサやりがタイムスケジュールでかぶっており物理的にエサやりが不可能だった。子供がエサをやれなくて残念だったので今度からずらしてほしい。
(次回開催の際はスケジュールを調整いたします)

かたばた通信

大森山動物園で2年間お世話になり、学んだことは数え切れないですが、特に印象に残っていることは「動物園はレクリエーションの場だけではなく、希少な動物を保護・繁殖していく場でもあること」、また「お客様はもちろん関係業者やボランティアなど裏から支える方がいて大森山動物園という一つの施設が成り立っている」ということです。当たり前の様な事だったのですが、動物園の見方が変わった瞬間でした。

いろいろな視点から動物園を見ると今までと違った発見ができると思いますので、みなさんそれぞれの大森山動物園を楽しんでいただけたら幸いです。

(宇佐美)